



DIABLO  
SEASON of  
WITCHCRAFT

大蛇の七人の  
花嫁

短編小説作：  
DAVID A. RODRIGUEZ

## ストーリー

MATTHEW J. KIRBY

## イラスト

RICHARD ANDERSØN

## 編集

CHLOE FRABONI

## デザイン&アートディレクション

COREY PETERSCHMIDT

## ロア・コンサルテーション

IAN LANDA-BEAVERS

## クリエイティブ・コンサルテーション

MATT BURNS, BEN CHANEY, NICK CHILANØ,

DAVID LØMELI

## プロダクション

BRIANNE MESSINA, CARLØS RENTA,

TAKAYUKI SHIMBØ, VALERIE STØNE

## スペシャルサンクス

RØD FERGUSSØN, RAFAEL TELLØ

## 翻訳

YUKI KATØ, RYØSUKE ØKUYAMA



Blizzard.com

© 2025 Blizzard Entertainment, Inc. BlizzardとBlizzard Entertainmentのロゴは、米国またはその他の国における

Blizzard Entertainment, Inc.の商標または登録商標です。

Published by Blizzard Entertainment.

この物語はフィクションです。名前、登場人物、場所、出来事は作者またはアーティストの想像の産物であるか、架空の存在として使われており、生死を問わず実在する人物、事業体、出来事、場所に類似するものがあつたとしても、それはまったくの偶然です。

Blizzard Entertainmentは作者または第三者のウェブサイトおよびそのコンテンツについて一切管理を行わず、それらに対する一切の責任も負いません。

## 大蛇の七人の花嫁

「自由を得るには力が必要だ」

後がない状況に思考と記憶が色あせ、その囁きだけがベリスの脳裏にこだましていた。疲労はすでに限界を超えていたが、まだ休むことはできなかった。すべてを見届けなくてはならない。ベリスの剥き出しの腕と足に縦横に走る引っかけ傷はごく浅かったが、その手は血塗れだった。ナイフが、彼女が手にする頃には鮮血に染まっていたのだ。まだ血を欲しているナイフを、ベリスはもう一度弄んだ。後ろにもたれかかると、背中が大木の肉に触れるのを感じた。

(肉? そんな、まさか) シフトドレスの薄い生地を通して伝わってきた木の感触は目の粗い革のもので、それでも樹皮らしかったが確かに脈動していた。彼女の背中にゆっくりと、規則正しく打ちつける律動は、大木の深奥から響いているように思えた。あるいは、眼前に横たわる娘たちの心臓の鼓動だろうか? 彼女たちの鼓動がありえないほど同調し、脈打つたびに大きくなり、体から血を押し出しているのかもしれない。

ベリスは再び仲間に視線を移した。古木から伸びている葉のない大枝の下のあちこちに、娘たちがうつ伏せに倒れている。空に浮かぶ、ほとんど満ちている春の月に陰鬱な光を投げかけられ、白い服をまとった彼女たちの体が柔らかく輝いていた。弱まっていく呼吸により寒い夜に水蒸気が吐

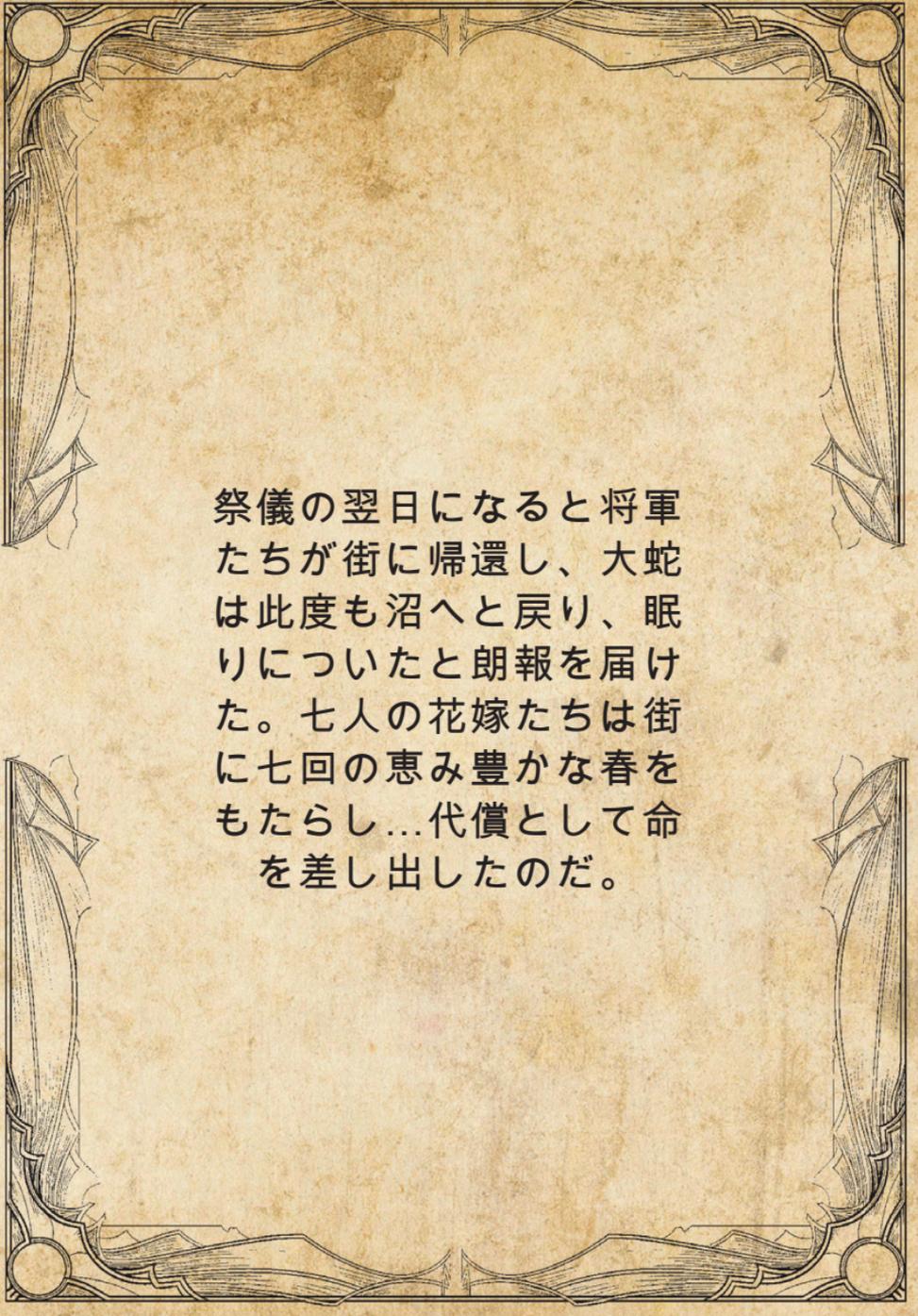
き出され、幻想的な光景を作り出していた。ベリスと... 彼女の計画がなければ、明晩の生贄の儀において彼女たちは麗しき生贄にされるどころだった。

ベリスが生贄の儀を初めて見たのは九歳の時だった。花嫁衣装をまとった七人の乙女たちが、三將軍の広大な邸宅の外にある庭園に裸足で入っていくところを見た。街外れに広がる玻璃のような水辺に足を踏み入れる七人の花嫁たちの姿に、ベリスを含め、集まった人々は釘付けになっていた。冷たく澄んだ泉の水は、曲がりくねった支流を通じて周囲の沼地へ注いでいた。水路を通るには大きすぎるはずだが、かの大蛇はなぜか必ず現れて供物を受け取っていく。少なくとも... 母親からはそう聞かされていた。生贄の儀の肝心な部分は、市井の人々が目にするには危険すぎた。祭儀を見届ける役を担っていたのは街の統治者、即ち、遥か昔に人々を沼地へと導いた強大かつ不老不死の三將軍だけだったが、ぼろぼろになった白い花嫁衣装の残骸と、そこに飛び散った血痕を見れば事の顛末は明らかだった。祭儀の翌日になると將軍たちが街に帰還し、大蛇は此度も沼へと戻り、眠りについたと朗報を届けた。七人の花嫁たちは街に七回の恵み豊かな春をもたらし... 代償として命を差し出したのだ。

七年ごとに娘たちを大蛇に捧げるといふ悪弊に対し、人々の良心はとうに麻痺していた。祭儀に目を瞑りさえすれば、富と安寧を享受できた。大蛇が人々の脅威となったことはなく、周囲を囲む沼地が外敵から土地を守ってくれた。ベリス自身、皆が惨劇を容認していることを心の底から許せるとまでは言わずとも、概ね理解はできた。こうしてベリスを含む街の女たちは例外なく、人身御供に選ばれることを心のどこかで恐れながら育った。

今年の生贄の儀に差し出される者の名前が発表されると、老軍曹が自ら三將軍の近衛隊を率い、娘たちを迎えにそれぞれの家を訪れた。集められた娘たちは、翌日の夜に大蛇にその身を捧げる泉を見渡せる小屋に閉じ込められた。警備の衛兵は一人だけ。何世代にも渡り生贄の儀と教化が行われてきたことで、抵抗はもはや笑止の沙汰となっていた。將軍たちは、よもや祭儀に抗う者がいようとは夢にも思わなかったのだ。

ベリスはその思い込みに賭け、母の果物ナイフを衛兵のうなじに突き刺



祭儀の翌日になると將軍  
たちが街に帰還し、大蛇  
は此度も沼へと戻り、眠  
りについたと朗報を届け  
た。七人の花嫁たちは街  
に七回の恵み豊かな春を  
もたらし...代償として命  
を差し出したのだ。

した。ペリスとほかの花嫁たちが衛兵を室内に引きずり込む間、窒息し、咽せた衛兵がゴボゴボと遠くには届かない程度の音を立てた。交替の衛兵は朝まで来ない。ほかの娘たちに自分の計画を受け入れさせた上で、ペリスはそう断言していた。

その彼女の思い込みは間違っていた。

逃げ出して二時間もしないうちに、花嫁たちは捜索隊の音を耳にした。茨をかき分けて進むうちに肌を棘に切り裂かれ、泥には足を取られ、まるで沼に行く手を阻まれているかのような状況に、全員が疲労困憊となった。そして巨大な裸木の下に辿り着いた頃には、逃げ切ることを諦めていた。七人の花嫁は、泥に悔し涙を零しながらその場に倒れ込んだ。計画は不首尾に終わった。ペリスは失敗したのだ。

そこに、囁きが聞こえてきた。

「自由を得るには力が必要だ...」

驚いた七人の娘は疲れ切った体をとっさに動かし、囁き声の主たちを探して辺りを見回した。だが人影は一切見当たらず、幾重にも重なった声はあらゆる方向から聞こえたような気も、虚空から響いてきたような気もした。

花嫁の一人が痺れを切らし、「出てきなさい！」と叫んだ。

ペリスはほかの娘たちに寄り添い、唯一の武器であるナイフを見つけた。

「選べ... さもなくば、ほかの誰かに選択を委ねることになる」

ペリスは振り返り、上を見た。間違いない。囁きは木から発せられたのだ。木の枝には何十もの首が吊るされており... そのうちひとつには見覚えがあった。スケイレイア、あるいは... その成れの果てだ。スケイレイアは幼かったペリスにとって子守のような存在だった若い娘で、母親が街に出かけた時はいつも面倒を見てくれたが、七年前に生贄として捧げられてしまった。

切断されたスケイレイアの首は、木に巻き付いた萎びたつる草に吊るされていた。一本に編まれた、かつては豊かで金赤色だった髪は、いまや絡み合った脆い鋼線のような有様になっていた。時の流れと悍ましい知識により目のくぼみにはしわが刻まれ、そこから虚ろな目蓋のぞいていた。締

まりのない口は、青白い顔の羊皮紙のような肌に付けられた切り傷のようで、そこから再び先ほどの言葉をかけられた。

「自由を得るには力が必要だ」

声に続き、先ほどはまだ距離があるようだった捜索隊の音がいよいよ近づいてくるのが聞こえる中、ベリスの心は穏やかな波に包まれたかのように落ち着き、思考が明晰になった。木から吊るされている首の多くは、若い娘のものだった。

街の娘たち。

大蛇の花嫁たちだ。

かつてスケイレイアと呼ばれた死者の何も映さぬ目を見据えながら、ベリスは息を整えた。

「恐れることはない」スケイレイアの首が囁いた。

「我らの知識を分け与えよう」と、別の首も囁きかけた。

「知識があれば、力と自由を得られる」

「我らに生き血を捧げ、木に仕えろと誓うのだ」

「さもなくば、街に連れ戻され—」

「あくる日には姉妹に加わっていることだろう」

ベリスは... 花嫁たちは真相を理解した。三將軍は大蛇を鎮めていたのではない。街の娘たちを、この木の贅にしていたのだ。そして贅の生き血と引き換えに... 権力が、不老不死を得ていると言ったところだろう。そもそも大蛇が危険な存在だったのかも疑わしい。

娘たちを見やったベリスの目に涙がこみ上げ、喉が詰まった。自分たちがどうすべきかについては、すでに確信があった。三將軍は何世代にも渡って人々を欺いてきたのだ。しかし... この木を信用できるのだろうか？さらに代償も伴う...

あまりに重い決断。今度はベリスが娘たちの視線を受ける番だった。答えを、導きを求める視線だ。三將軍に逆らい、脱走しよう娘たちを説き伏せたのはベリスだ。彼女が今すぐ行動を起こさなければ娘たちは沼地へ逃げ込み、あの悍ましい死の円環に引き戻されてしまうだろう。將軍ともなれば経験もあるだろうが、ベリスのこれまでの人生では無縁の選択で、彼女には選ぶ準備ができていなかった。

頭がぐらぐらした。首と花嫁たちの視線を感じた。誰もが答えを求めていた。これまでに経験がない、重い決断を迫られていた。だが、どんな選択をしても血が流れ犠牲が生まれる。血が流れそして…。

ベリスが手にしたナイフを見ると、まだ衛兵の血がついていた。そんなつもりでナイフをくすねた訳ではなかった。何もせずに殺されるのが嫌だったただだ。一瞬でも抵抗できればと思っていた。どうしようもなくなった時、自らの意思で選択できるようにしておきたかった。一瞬でもあれば、自由になれる。

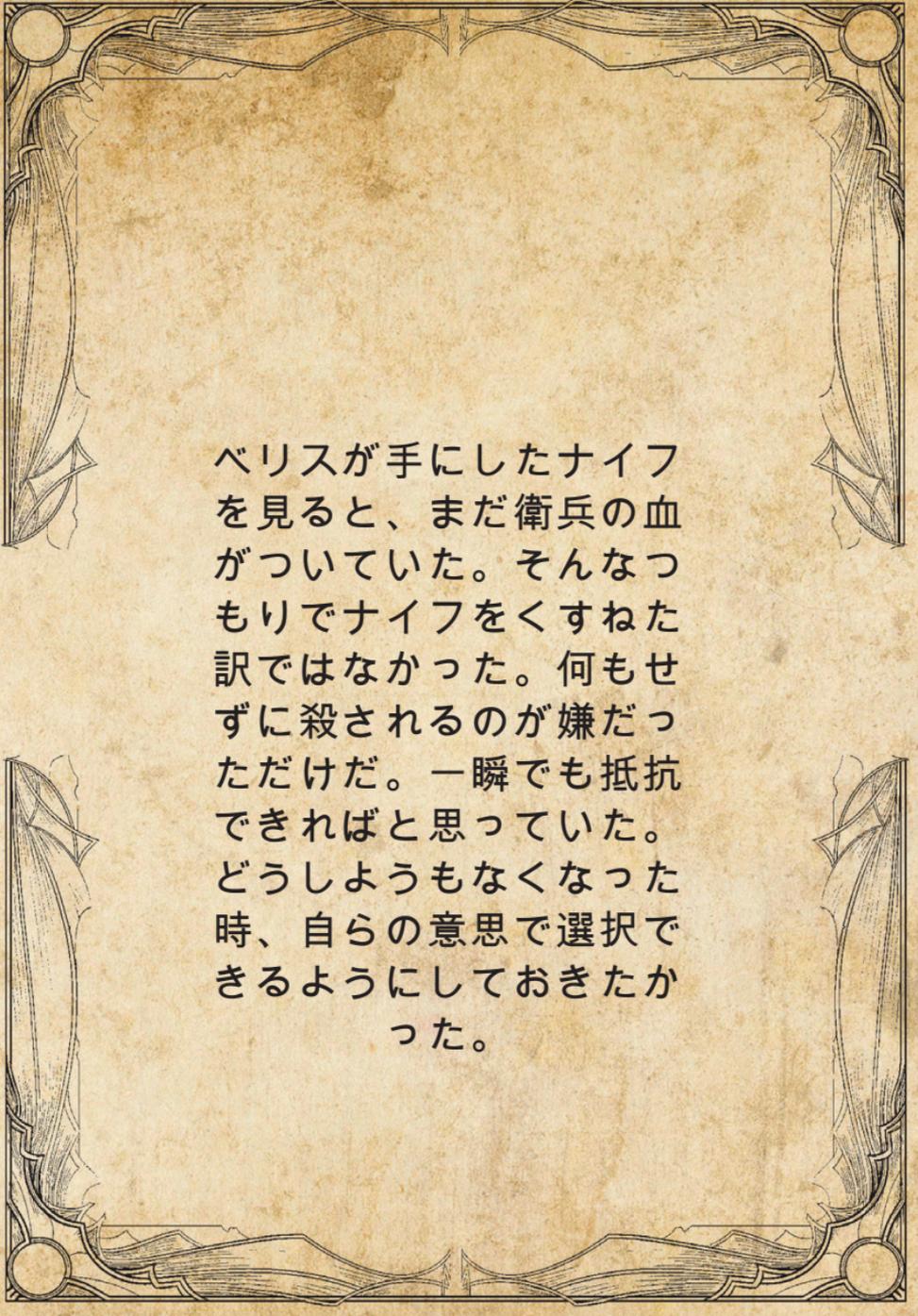
ベリスは掠れた声を絞り出した。「よく聞いて。捕まったら、私たちは明日死ぬ。まずは、したことの代償を払う羽目になるわ。間違いなく、飾り立てたポニーみたいに街中を引き回された後、沼まで歩かされて、そこで惨たらしく殺されつつ高笑いされることになるでしょうね」そして、木に吊るされた首を指さした。「その挙句、ああなるの。あれが大蛇の花嫁の真実よ」

ベリスは顔を上げ、首を順番に見ていった。「確かに、この木は力を…自由を得るための力をくれると言ってるけど、私自身は何の保証もできない。取引に応じた後、何が起きるか分からないの。このまま沼地で死ぬことになるかもしれない」

「でも、あの大嘘つきの鬼畜どもの言いなりになって死ぬぐらいなら、この手で、私自身の意志で、同じ境遇のあなたたちのそばで、泥に塗れて死ぬ道を選ぶ」そう語る声は落ち着いていたが、断固たる決意が込められていた。

「私は、どうするかを決めた」ベリスは言った。「あなたたちも決めて」

短い沈黙の中で女たちは互いの顔を見合わせ、一言も交わすことなく、ベリスを始まりと終わりとするぎこちない輪になって木の根本に並んだ。右隣にいた、確かディーノという名前の女がベリスの持っていたナイフを強引に取り、深呼吸すると素早く自らを切りつけた。ベリスは身じろぎひとつすることなく、女たちが代わる代わるナイフを手にして血に飢える木の根元に血を流す様を見つめていた。彼女は自分が見届人になる必要があることを理解していた。自分が最後でなければ、この選択が報われるかど



ベリスが手にしたナイフを見ると、まだ衛兵の血がついていた。そんなつもりでナイフをくすねた訳ではなかった。何もせず殺されるのが嫌だけだ。一瞬でも抵抗できればと思っていた。どうしようもなくなった時、自らの意思で選択できるようにしておきたかった。

うか確認できない。

木が約束を守るのを、見届ける必要があった。

---



甲高い叫び声が槍のように闇夜を切り裂き、老軍曹は歩みを止めた。後ろに続く四人の兵は訓練が行き届いており、直ちに停止して武器の柄に手をかけ、危険を見逃すまいと周囲に目を光らせた。老軍曹は耳を澄ましながら顔に手を伸ばし、革の胸当ての下から首を通り、右の頬まで伸びるギザギザの古傷を引っかいた。古傷を疼かせる気配が漂っており、彼はどうにもそれが気に入らなかった。

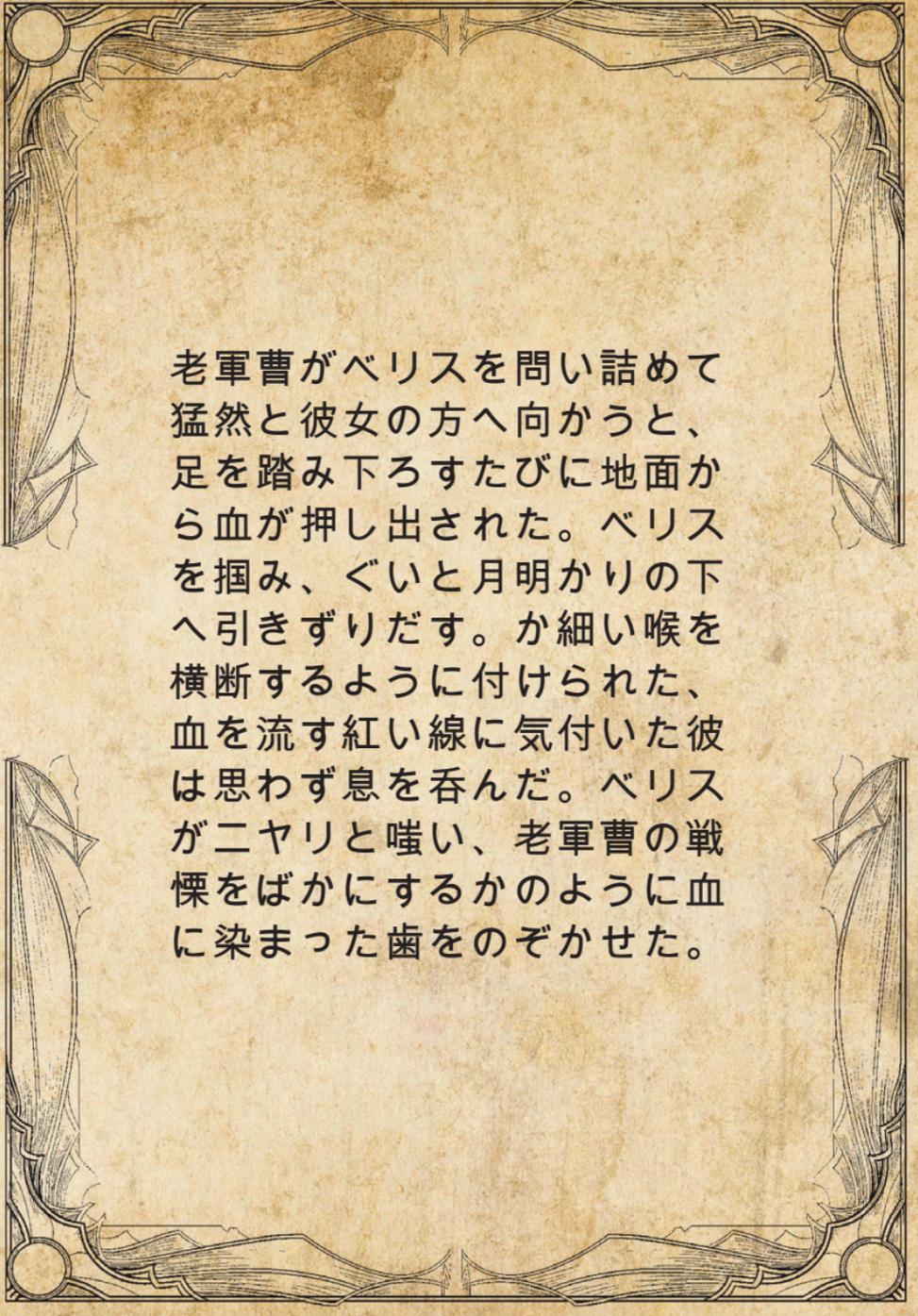
「ただの鳥か」老軍曹は唸るように言った。愚かな娘たちの痕跡を引き続き追うよう部下たちに指示する声には、苛立ちと怒りの念が込められていた。「前進せよ。三將軍は夜明けまでに連れ戻すようお望みだ」一同は呻くように了解を伝え、命令に従った。血気盛んだった頃の老軍曹は兵に手酷く当たることがあり、火に油を注ぎかねない真似をする者はいなかった。女たちの痕跡は、この荒れ果てた沼地で唯一の目印である、枯木の巨大な枝張りに向かって続いているらしかった。

数分のうちに小さな空き地に辿り着いた一行は、先ほど立ち止まる理由となった鳥に出くわした。鳥はカラスだった。木の上方に止まったカラスは、顔を赤くした軍曹を嘲笑っているかのように体を上下に動かしつつ羽ばたいた。

老兵が下を見ているカラスの視線を追うと、そこには陰惨な光景が広がっていた。彼は荒々しく木の根を踏みつけながら花嫁たちを確認して回ったが、いずれも死の淵にあり、そのことを確認するたびに悪態が口をついて出た。傷が酷すぎる上、治療の技が使える者は近くにいない。まったく想定外の事態だ。老軍曹は失望に歯がみした。これでは三將軍の不興を買ってしまうだろう。

その時、暗闇からしわがれた小さな声が聞こえた。「もう手遅れよ」

とっさに振り返った老軍曹の目に映ったのは、巨木の幹にもたれかかるペリスの姿だった。「貴様！ 一体何をした？」老軍曹がペリスを問い詰め



老軍曹がベリスを問い詰めて  
猛然と彼女の方へ向かうと、  
足を踏み下ろすたびに地面か  
ら血が押し出された。ベリス  
を掴み、ぐいと月明かりの下  
へ引きずりだす。か細い喉を  
横断するように付けられた、  
血を流す紅い線に気付いた彼  
は思わず息を呑んだ。ベリス  
がニヤリと嗤い、老軍曹の戦  
慄をばかにするかのよう血  
に染まった歯をのぞかせた。

て猛然と彼女の方へ向かうと、足を踏み下ろすたびに地面から血が押し出された。ペリスを掴み、ぐいと月明かりの下へ引きずりだす。か細い喉を横断するように付けられた、血を流す紅い線に気付いた彼は思わず息を呑んだ。ペリスがニヤリと嗤い、老軍曹の戦慄をばかにするかのように血に染まった歯をのぞかせた。

「お前の主にはもう従わない」そう告げたペリスの囁き声に、老軍曹は雷に打たれたような衝撃を受けた。「私たちは自由だ」ペリスが何か言うたびに木が反応し、震えた。恐ろしいほどの力強さで枝が空に爪を立て、大きくなっていく木が苦悶と愉悦に甲高い音を立てると、後ろに控えていた兵士たちが悲鳴を上げた。枝は密度を増しつつ伸び、根は大地を割り、兵士たちに影を落とした。

ペリスが声を上げて笑う中、兵士たちは身を寄せ合い、大慌てで後退していったが、老軍曹は彼女の肩を掴んだままだった。彼が立ちすくんでいた理由は木ではなく、カラスだった。木が自然の掟に逆らい、月に向かって伸びていく際に轟かせている破裂音に重ねて、巨大なカラスが甲高い鳴き声を上げていた。空洞の多い繊細な骨が次々に折れては繋がり、カラスは苦痛と狂喜に鳴き声を上げながら生まれ変わった。カラスが広げた漆黒の幕のような翼は、鷲のそれに匹敵するほど大きかった。未だかつて存在したことがない、存在できるはずがない鳥がそこにいた。

カラスは大きな頭を傾け、金色の目で老軍曹を見据えた。

その眼差しは悠久の時を感じさせ、叡智を湛え、飢えていた。

カラスの鳴き声とペリスの笑い声が混ざり合い、空き地から逃げ出す兵士たちを追って甲高く響いた。



街に再び夜の帳が下りる頃、何百人もの群衆が生贄の儀を見ようと集まってきた。人々は囁き声を交わし、生贄の義務を放棄した身勝手な女たちと、今夜の祭儀を完遂するために土壇場で集められた七人の哀れな娘たちに関する噂話に興じていた。日中に食べ物や音楽で賑わいを提供していた荷車や屋台は店じまいし、間もなく始まる祭儀を見届ける、物言わぬ観客

のように佇んでいた。

不老不死の三將軍は邸宅の庭園の中央にある彫刻を施された高座に立ち、大きなかがり火に照らされていた。正装たる鎧に付けられた宝石や貴金屬の装飾が煌めき、また老いを知らない相貌は羽根飾りの付いた兜に覆われ、群衆が見ることはできなくなっていた。高座の傍らには老軍曹が直立不動の姿勢で控えていた。胴鎧で見えないが、その背中には付けられたばかりの傷があった。

將軍の手振りて群衆が静まりかえり、花嫁たちが高座に向かって進み始めた。豪華な格好の二人の兵士が將軍の旗を掲げ、ペールを被った七人の乙女の列を先導していた。

老軍曹は花嫁たちの列が進むほど古傷の疼きが強くなるのを感じた。また、沼地で取り逃がした花嫁たちそれぞれに付けられた七つの深い傷に汗がしみ、こちらは焼けるような痛みをもたらしたが、彼は祭儀の最中、微動だにできなかった。老軍曹は歯を食いしばり、將軍の検分を受けるために高座に並んだ女たちを見つめた。三將軍が街の繁栄と、今回の生贄により大蛇の飢えが満たされ、新たな七年の栄華がもたらされることについて滔々と述べた。

老軍曹にとっては聞き飽きた話でほとんど興味を持たず、生傷の不快感と古傷の酷い疼きが気になって仕方がなかった。徐々に酷くなっていく強い疼き。前にこの疼きを感じたのはいつだったか…。

何たることだ。

三將軍の一人が一步前に出て中央の乙女に手を伸ばし、籠手を付けた手でペールの縁を持ち上げた。老軍曹は叫びながら飛び出したが、危急を知らせるその声は、再び鳴り響いたトランペットの合奏によりかき消されてしまった。沼地であの忌々しい女に言われた言葉が耳の奥に蘇った。

彼はもう、手遅れだった。

---

將軍によって持ち上げられたペールの下で、ペリスは嗤った。喉を横断するように付いた白く清潔な傷跡が、挑発的に脈動していた。「囁きの木よ

り、將軍閣下にご挨拶申し上げます」恨みを込めて彼女は言った。「わたくしったら、実に素晴らしい生贄でしょう？」

若い女に見据えられた將軍は、凍り付いたように動きを止めた。

「皆様が木と交わした誓約は素晴らしく巧妙なものでございました」ペリスは言った。「七つの首を差し出せば、さらに七回の夏が対象となる誓約。教えてください。自らが生きながらえるために下々の民を騙し、娘を差し出させることに抵抗はありましたか？それとも、時間が経てば慣れてしまうものなののでしょうか？」

將軍は喚き声を上げながら後ずさりしたが、すでに花嫁たちに取り囲まれており、高座から逃げ出すことはできなかった。ペリスは將軍の醜態を一顧だにせず、手を伸ばして兜を指先でなぞった。「皆様が統治している愚鈍な民衆は、金や宝石がこの土地の富なのだと信じております。ですがまことの富... 膨大で計り知れない宝物は、すべてここに詰まっています」強調を込めて、彼女は兜の額をトントンと叩いた。

「大蛇はまさに完ぺきな脅威でした。敵も、味方も、民草も... 誰もが大蛇を恐れていた。皆様を脅かす者たちが沼地に足を踏み入れることはなく、出て行く者もない。誰かがあの木の存在を知り、皆様が... しでかしたことが明るみに出ることもない」

にわかにはペリスが横を向き、武器を振り上げて突撃してくる老軍曹を脱み付けた。ペリスが老軍曹に向けて顎を持ち上げると、突撃は止まった。

彼の心臓は胸の中で破裂していた。

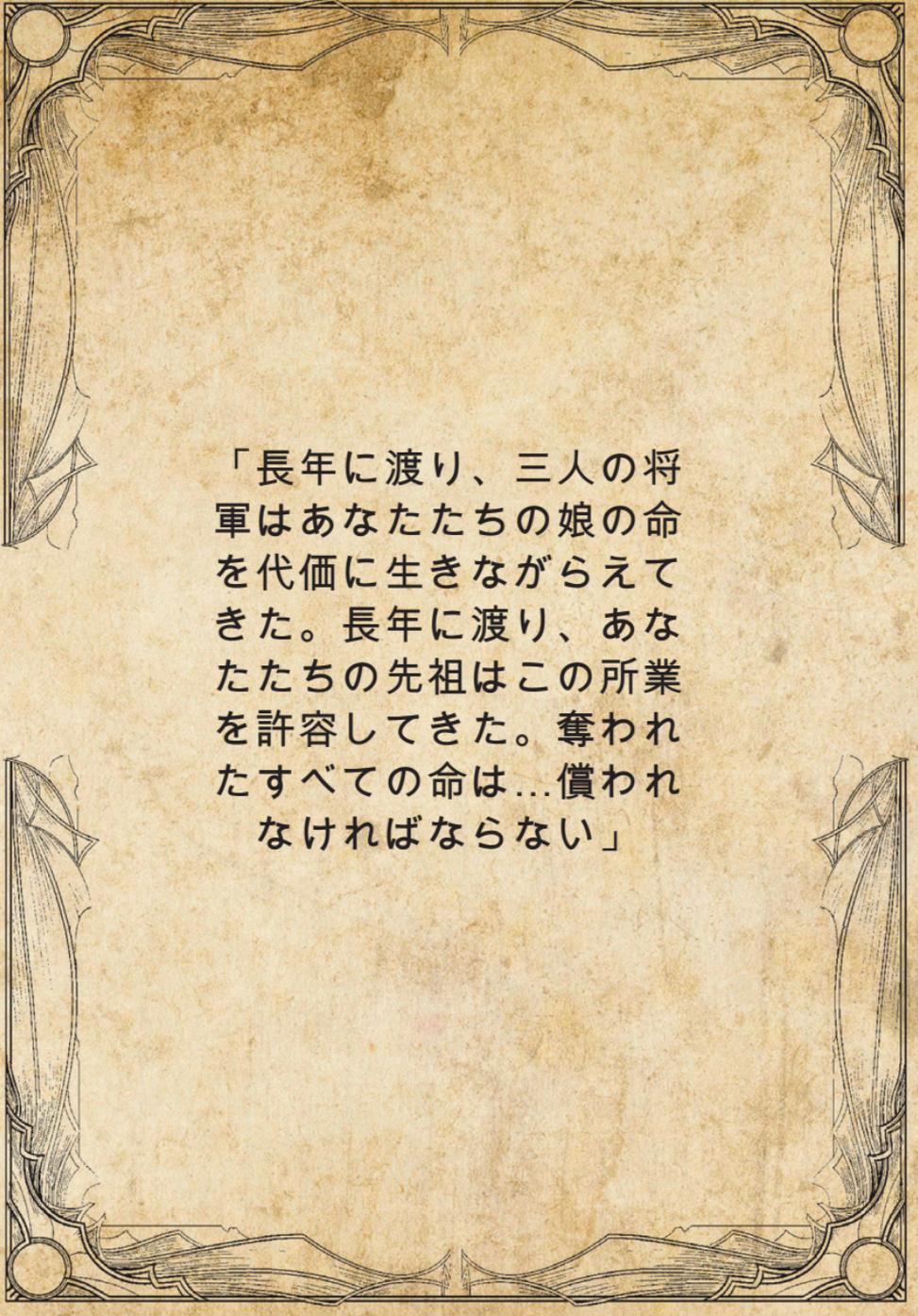
「でも私たちに知られてしまった」

ほかの花嫁たちが、関の声を上げてペールをかなぐり捨てた。三將軍に襲いかかる花嫁たちの腕の傷跡は、きれいに癒えていた。

「そして、私たちも誓約を立てた。禁じられた知識、力、自由...」

集まっていた街の人々は、白装束の女たちが三將軍の鎧兜をこじ開けて生身の彼らを引きずりだして裁きにかける様を、何も言わず呆然と見ていた。

「そのすべてを手にするため、私たちは木に仕えることを誓った。手始めに、木が切望している三つの首を取り戻そう」



「長年に渡り、三人の将軍はあなたたちの娘の命を代価に生きながらえてきた。長年に渡り、あなたたちの先祖はこの所業を許容してきた。奪われたすべての命は...償われなければならない」

三将軍は慈悲を求めず、花嫁たちも慈悲を与えなかった。暫しの時が過ぎると、剥ぎ取られた金属や骨、そして肉片が散らばる中に将軍たちの残骸が力なく横たわるばかりとなった。白い衣装を紅血に染めた花嫁たちは、怯える見物人たちに断罪の眼差しを向けながら静かに佇んでいた。そして高座に影が落ちると、群衆が一斉に息を呑んだ。月光を遮りそうなほど巨大な翼を持つ一羽のカラスが、上空を舞っていた。

「あなたたちも全員が共犯者だ」ベリスの声は穏やかながら、証言の如く庭園に響き渡った。「長年に渡り、三人の将軍はあなたたちの娘の命を代価に生きながらえてきた。長年に渡り、あなたたちの先祖はこの所業を許容してきた。奪われたすべての命は...償われなければならない」

その言葉に応えたかのようにカラスが矢の勢いで降下し、将軍の一人の死体に降り立った。カラスは巨大な嘴を将軍の首に突き刺し、肉を引きちぎり始めた。怯えた悲鳴や、否定と無実を主張する声が群衆から上がったが、すぐに再び静寂が訪れた。カラスが瞬間に務めを終えると、一人目の将軍の首と共に飛び立った。

「お前たちは慈悲を乞う娘たちの声に耳を塞いだ。将軍がもたらす後ろ暗い繁栄の中で生きるため、娘たちを差し出したのだ」ベリスが怒りを浴びせ、それを強調するかのよう、カラスが甲高い鳴き声と共に舞い戻った。カラスは二人目の将軍の死体に飛びつき、首の肉をちぎり始めた。

その間にベリスは懐に手を入れ、ひとつかみの香を二つ取り出した。そして香の粉をかがり火に投げ込むと、彼女の目の前に大量の煙が立ち昇り、たなびく煙に送られるように、カラスが二つ目の首を運び去った。

「あのカラスが三つ目の首を木に届けた時、私たちと木の契約が成立する。三将軍が借り物の命を通じて得た知識は、この先の長きに渡って囁きの木の糧となる。だがお前たちの借りは...」ベリスは香の煙をさらに空高くへと送るかのよう、両の手で煙をかき回した。「お前たちの借り、お前たちの先祖の血の借りは、返済の期限をとくに過ぎている」

カラスが戻り、三つ目の首を掴んで飛び立った。飛び立つ瞬間、カラスは勝ち誇るように甲高い鳴き声を再び上げたが、今度はそれに呼応して轟音が響き渡った。

集まっていた人々が悲鳴を上げ始め、四方八方に散った。無秩序な群衆

は恐怖に駆られて他者を踏みつけ、ばらばらになっていった。ほかの花嫁たちはペリスのもとに集まり、沼で木と誓約を結んだ時のように手を繋いで半円状に並んだ。

声をひとつにして、大蛇の七人の花嫁が宣言した。「選択はなされた」

大地が割れ、岩が破裂し、三將軍の邸宅の下から猛然と大蛇が現れ、経た年月を示す巨大なとくろを巻いた。花嫁たちが群衆の悲鳴に浸り、恐怖を堪能している間、大蛇はその場を動かずに体をうねらせていた。だが大蛇が何もせず待機していたのは、それが人知の及ばぬ道理で動いているからだ。大蛇を呼び出したのは強力な妖術だが、大蛇の意思まで奪うものではなかった。

七人の花嫁は繋いだ手を空へ掲げ、声を合わせて解放の言葉を唱えた。これが最後の唱和となるだろう。彼女たちは、この後は個別に行動することになる。七人の花嫁はそれぞれの拠点を沼地に築き、別々に囁きの木に仕えるのだ。

衰えたる者、治療師、あるいはアンゼヒアの... 妖術師。様々な名前で呼ばれることになるだろう。今日この日より、大蛇の七人の花嫁とその志を継ぐ者たちが他者の決断に身を委ねることは決してない。

「私の道は、私が選ぶ」ペリスは叫んだ。

カラスが空高く舞い上がり、同意を示す鳴き声を上げるのと同時に、大蛇は街に完全なる破滅をもたらしにかかった。

斯くして、三將軍と彼らが支配した街は歴史から消し去られ、血と灰からハウザーの妖術師が現れた。

# 著者紹介

David A. Rodriguezは、Blizzard Entertainmentのアソシエイト・ナラティブディレクター兼ライターです。小説やグラフィックノベルの著者であり、現在は絶賛を博する「ディアブロ IV」シリーズの制作に携わっています。Davidはサウス・シカゴの出身で、ロックフォード大学でミュージカル劇の学士号（芸術）を取得後、参加するすべてのプロジェクトにミュージカル曲を取り入れることを目指し続けています。これまでに携わった作品には、「トランスフォーマー：ウォー・フォー・サイバトロン」シリーズや「Marvel: Ultimate Alliance 2」があります。また、「M.A.S.K.」、「Rising Sun」およびハズブロの「First Strike」といったコミックの執筆経験もあります。さらには、「スカイランダーズ」や「Destiny 2」といった大人気シリーズにおける執筆を通じ、コミック愛とゲーム愛の両方を同時に発揮する機会にも恵まれました。直近では、「ディアブロ IV」の拡張パック「憎悪の器」でナラティブ・リードを務めています。